

青嶺

文責 田中泰司

伊万里市立青嶺中学校

本年もよろしく願います

生徒たちからもらった大きなパワー☆

始業式の朝、生徒たちを出迎えるために、校舎の入り口に立ち、寒さに震えながら待っていました。

寒いし、天気も良くないし、休み明けだし、今日は元気ないだろうなあ…と予想していましたが、ところが、ほとんどの生徒たちが、すぐく元気な声で挨拶をし、中には「明けましておめでとうございませう。今年もよろしくお願います。」と深々と頭を下げる人もいて、良い意味で裏切られ、非常に大きなパワーをもらえました。

掃除の後、始業式が行われましたが、良い雰囲気最後まで集中して参加し、素晴らしいスタートとなりました。この生徒の前でこんなふうに話ができるのはあと何回かな？と思った途端に、急に涙が出そうになり、言葉に詰まりました。以下は、始業式で話した事です。

新年、あけましておめでとうございませう。

新しい年を迎え、新たな気持ちで登校してきたことと思います。この仲間と過ごす時間も、残り三ヶ月を切りました。感謝の気持ちを忘れずに、日々を大切に過ごしていきたいと思います。

さて、皆さんは「ノミ」を知っていますか？小さくてとてもジャンプ力のある昆虫です。ノミは跳躍力が3、40cmあり、人間に例えるなら300メートルも飛べるそうです。これは東京タワーを飛び越える高さに匹敵します。

そのノミに10cmのガラスのコップをかぶせるとどうなるでしょうか？ガラスの天井にぶつかり、ノミは学習して、10cmの高さでしか飛ばなくなります。しばらくしてコップを取り外しても、ノミは相変わらず10cmの高

さでしか飛べないのです。自分の「限界」を勝手に決めてしまうのです。

では、そのノミが再び元のように飛べるようにするにはどうしたらいいのでしょうか？それは仲間のノミと一緒に過ごさせることだと言われています。周囲の仲間たちが勢いよく飛んでいる様子を見て、自分の力を思い出し、取り戻していくのです。

このことから私たちは二つのことを学べます。一つは、自分自身に勝手に限界を決めていないか？を問い直すことです。もっとできるはずなのに、「自分分はこれだけしかできない」と思い込んでいないでしょうか？自分の心に問いかけてみてください。

もう一つは、集団の「質」の重要性です。「質」の高い集団を皆で作ります。お互いに伸びる環境を整えていくことがとても大切なのです。クラスやチーム、学校全体、ひいては地域社会が一体となって、個人と全体を互いに高め合う集団を築けば、きっと居心地がよく、素晴らしい場となります。

このエピソードから、もう一つ重要なことがわかります。それは、「仲間の存在が自己成長の鍵である」ということです。ノミが仲間と共にいることで本来の力を取り戻したように、私たちも友人や家族、先生方とどのように関わり合うかが非常に重要なのです。

これからの道のりで壁にぶつかったり、自分の力を疑ったりすることもあるかもしれません。しかし、そんな時こそ仲間や周囲の人々の存在を頼りにしてください。他者との関わりや、対話を通して成長し続けることで、本来の力を超えてもっと大きな壁を

乗り越えられるようになるのです。

そしてまた、皆さん自身も、周囲の誰かの成長を助ける大切な存在であることを忘れないでください。互いに言葉を交わし、深く知り合いながら、ポジティブな影響を与えあい、共に成長していきましょう。

最後に、皆さん一人ひとりが持つ「可能性」は計り知れませんが、自分を信じ、仲間を大切にしながら、この三学期を一杯楽しみながら高く、大きく飛躍してください。私たち教職員も皆さんと共に高く飛べることを楽しみにしています。

残り三ヶ月を皆で力を合わせ、皆で成長していける質の高い学校をつくっていきましょう。そして、一人ひとりが成長し、夢や目標を実現できるよう、一緒に頑張っていきましょう。皆さんなら、皆さんとなら必ずできる！私は信じています！

何を信じる？②

地図上は真っすぐ一直線のルートです。ということは当たり前に山脈を真っすぐ突っ切ることはない、上がり下がりの激しい、高低差があるルートになります。ケアンズを出てしばらくしたらすぐに未舗装路になり、スピードが出る直線はジェツ

トコースターのように下り、下り坂の一番下ではバイクのサスペンションがフルボトムします。

初日、計画通りラウラまで250キロを走りましたが、灼熱の太陽と途中の山道での転倒でへとへとです。おまけに暑くてテントでなかなか眠れずに、疲労はたまる一方でした。

二日目アーチャーリバー泊、この先は人家がほとんどありません。しばらく行くとOLDルートとNEWルートに道が分かれまです。途中の川でバイクが岩にはまり、抜け出すのに時間がかかったため、短い方のOLDルートを選びました。「厳しいぞ」と言う人も

いましたが「楽勝だよ！」と言った人の方を信じてしまい「たいしたことない。たとえ厳しい道でもそんなに長くは続かないだろう」と、自分のバイクの腕を過信して樂觀視していたのです。

OLDルートに入ったとたん、道幅は車がやっと一台通れるくらいに細くなり、おまけに深いわだちが刻まれており、バイクだと深すぎてタイヤがはまり、狭い道路の真ん中か両端を通るほかありませんでした。さらに高低差があり砂の深さも場所によっては30cmをこえ、バイクをコントロールできず数えきれないくらい転倒しました。日没まで走り続けましたが、120キロしか進みませんでした。十四時間走って…です。